

4 グリーン関数：ポアソン方程式

電磁気で現れるポアソン方程式をフーリエ変換で解いてみよう。静電ポテンシャル ϕ は電荷密度 ρ を用いて次のようなラプラス方程式で表される：

$$\Delta\phi = -\frac{\rho}{\varepsilon_0}.$$

このタイプの微分方程式の極めて広い分野で現れる。例を挙げれば、静電場、重力場、流体での速度ポテンシャルなどの決定においてである。そのために一般的な形の方程式

$$\Delta\phi = -s \tag{4.1}$$

を考える。 s は場 ϕ を作り出す源 *source* の場である。(4.1) を解くために、Green 関数 $G(\mathbf{x})$ を導入するのが便利である：

$$\Delta G(\mathbf{x}) = -\delta(\mathbf{x}). \tag{4.2}$$

すると (4.1) の答えは

$$\phi(\mathbf{x}) = \int d\mathbf{x}' G(\mathbf{x} - \mathbf{x}') s(\mathbf{x}') d\mathbf{x}' \tag{4.3}$$

と表される。

(4.3) が (4.1) を満たすのは次のように分かる。(4.3) のラプラシアンをとると、

$$\Delta\phi(\mathbf{x}) = \int d\mathbf{x}' \Delta G(\mathbf{x} - \mathbf{x}') s(\mathbf{x}') d\mathbf{x}' = - \int d\mathbf{x}' \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}') s(\mathbf{x}') d\mathbf{x}' = -s(\mathbf{x})$$

となり、(4.1) が導かれたことになる。

(4.2) をフーリエ変換の方法によりとく。フーリエ変換と逆変換の定義は次の通りである。一般的なケースを扱うために次元は d とする。

$$\hat{f}(\mathbf{k}) = \int f(\mathbf{x}) e^{-i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d\mathbf{x}, \tag{4.4}$$

$$f(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^d} \int \hat{f}(\mathbf{k}) e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d\mathbf{k}. \tag{4.5}$$

この変換が正しいことは次のように確かめられる。(4.5) に (4.4) を代入すれば、

$$f(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^d} \int f(\mathbf{y}) d\mathbf{y} \int e^{i\mathbf{k}\cdot(\mathbf{x}-\mathbf{y})} d\mathbf{k} \tag{4.6}$$

しかし

$$\int e^{i\mathbf{k}\cdot(\mathbf{x}-\mathbf{y})} d\mathbf{k} = (2\pi)^d \delta(\mathbf{x} - \mathbf{y}) \tag{4.7}$$

の関係をを用いると、(4.6) の右辺は左辺と一致する。(4.7) はフーリエ関数 $e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}}$ の完全性とよばれる。重要なことは $f(\mathbf{x})$ と $\hat{f}(\mathbf{k})$ に含まれる情報はまったく同等であり、実空間もフーリエ空間のどちらで扱ってもよい。

それでは (4.2) をフーリエ変換で解こう。

$$G(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^d} \int \hat{G}(\mathbf{k}) e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d\mathbf{k}, \quad (4.8)$$

$$\delta(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^d} \int e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d\mathbf{k} \quad (4.9)$$

を (4.2) に代入して、関数 $e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}}$ の完全性から

$$\hat{G}(\mathbf{k}) = \frac{1}{k^2} \quad (4.10)$$

である。 $\hat{G}(\mathbf{k})$ はベクトル \mathbf{k} の大きさ k にしかよらないので、引数は k だけである。(4.10) を (4.8) に代入すれば、

$$G(\mathbf{x}) = \frac{1}{(2\pi)^d} \int \frac{1}{k^2} e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{x}} d\mathbf{k} \quad (4.11)$$

である。

4.1 1次元

1次元の場合はこの方法は適用しにくい。その場合は元の方程式に立ち返る：

$$\frac{d^2}{dx^2} G(x) = -\delta(x). \quad (4.12)$$

$x \neq 0$ 以外では右辺はゼロであるので、

$$G(x) = \begin{cases} ax & x > 0 \\ -ax & x < 0. \end{cases} \quad (4.13)$$

(4.12) を $x = -\delta(> 0)$ から $x = \delta$ まで積分すると

$$\left. \frac{dG}{dx} \right|_{-\delta}^{\delta} = -1.$$

これに (4.13) を代入すると、

$$2a = -1 \rightarrow a = -\frac{1}{2}.$$

したがって

$$G(x) = -\frac{1}{2}|x| \quad (4.14)$$

である。

4.2 2次元

波数 k の座標を (k, θ) とし、 x と k のなす角度を θ とすれば、 $dk = kdkd\theta$ であるので、

$$\begin{aligned} G(r) &= \frac{1}{(2\pi)^2} \int_0^\infty \frac{dk}{k} \int_0^{2\pi} e^{ikr \cos \theta} d\theta \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^\infty \frac{dk}{k} J_0(kr) \end{aligned} \quad (4.15)$$

ここで

$$\pi J_0(kr) = \int_0^\pi e^{ikr \cos \theta} d\theta$$

を用いた (岩波数学公式集 3) (4.15) を r で微分して、 $\partial J_0(kr)/\partial r = -kJ_1(kr)$ を用いると、

$$\begin{aligned} \frac{dG(r)}{dr} &= -\frac{1}{2\pi} \int_0^\infty J_1(kr) dk \\ &= \frac{1}{2\pi r} J_0(kr) \Big|_0^\infty = -\frac{1}{2\pi r}. \end{aligned} \quad (4.16)$$

ここで $\int J_1(kr) dk = -(1/r)J_0(kr)$ を用いた。上の式を r で積分すると、

$$G(r) = -\frac{1}{2\pi} \log r \quad (4.17)$$

が導かれる。

例として、単位長さあたり σ の電荷をもつ線電荷の作る電場を求めよう。電荷から r だけ離れた点での電位は

$$\phi(\mathbf{x}) = -\frac{1}{2\pi\epsilon_0} \log r \quad (4.18)$$

4.3 3次元

波数 k の座標を (k, θ, φ) とし、 x と k のなす角度を θ とすれば、 $dk = k^2 dk \sin \theta d\theta d\varphi$ であるので、 $\cos \theta = \mu$ とすれば、

$$\begin{aligned} G(r) &= \frac{1}{(2\pi)^3} \int_0^\infty dk \int_{-1}^1 d\mu \int_0^{2\pi} d\varphi e^{ikr\mu} \\ &= \frac{1}{2\pi^2} \int_0^\infty dk \frac{\sin kr}{kr} = \frac{1}{2\pi^2 r} \int_0^\infty dt \frac{\sin t}{t} \\ &= \frac{1}{4\pi r}. \end{aligned} \quad (4.19)$$

ここで $\sin t/t$ の $t=0$ から $t=\infty$ の定積分は $\pi/2$ である。

4.4 任意の次元

知的トレーニングもたまには必要である。任意の次元 d の世界に遊んでみよう。デカルト座標はもちろん (x_1, x_2, \dots, x_d) で表される。 d 次元極座標は、3次元を単に拡張して考えることにすれば、 $(r, \theta_1, \theta_2, \dots, \theta_{d-1})$ で表される。

$$\begin{aligned} x_1 &= r \cos \theta_1, \quad x_2 = r \sin \theta_1 \cos \theta_2, \quad x_3 = r \sin \theta_1 \sin \theta_2 \cos \theta_3, \dots, \\ x_d &= r \sin \theta_1 \sin \theta_2 \dots \sin \theta_{d-1}. \end{aligned}$$

3次元では x_1 は z であり、 x_2 は x 、 x_3 は y であった。角度 θ_i の定義領域は、

$$0 \leq \theta_1, \theta_2, \dots, \theta_{d-2} \leq \pi, \quad 0 \leq \theta_{d-1} \leq 2\pi$$

である。Jacobian は

$$J = \frac{\partial(x_1, x_2, \dots, x_d)}{\partial(r, \theta_1, \dots, \theta_{d-1})}$$

であり、行列式を計算すれば、

$$J = r^{d-1} \sin^{d-2} \theta_1 \sin^{d-3} \theta_2 \dots \sin \theta_{d-2}$$

である。

問題 4-1 . Jacobian が上のようになることを示しなさい。(ヒント: 3次元で行って、それを拡張しよう。)

半径 R の d 次元球の体積 $V_d(R)$ を計算しよう。

$$\begin{aligned} V_d(R) &= \int_{x_1^2 + x_2^2 + \dots + x_d^2 \leq R^2} dx_1 dx_2 \dots dx_d \\ &= \int_0^R r^{d-1} dr \int \sin^{d-2} \theta_1 \sin^{d-3} \theta_2 \dots \sin \theta_{d-2} d\theta_1 d\theta_2 \dots d\theta_{d-2} d\theta_{d-1} \\ &= \frac{R^d}{d} S_d. \end{aligned} \tag{4.20}$$

ここで S_d は d 次元単位球の表面積で

$$S_d = 2\pi \int_0^\pi \sin^{d-2} \theta_1 d\theta_1 \int_0^\pi \sin^{d-3} \theta_2 d\theta_2 \dots \int_0^\pi \sin \theta_{d-2} d\theta_{d-2}. \tag{4.21}$$

次のような公式

$$\int_0^\pi \sin^n \theta d\theta = 2 \int_0^1 (1 - \mu^2)^{(n-1)/2} d\mu = \sqrt{\pi} \frac{\Gamma((n+1)/2)}{\Gamma((n+2)/2)}$$

を用いれば、

$$S_d = 2\pi \sqrt{\pi} \frac{\Gamma((d-1)/2)}{\Gamma(d/2)} \sqrt{\pi} \frac{\Gamma((d-2)/2)}{\Gamma((d-1)/2)} \dots \sqrt{\pi} \frac{\Gamma(1)}{\Gamma(3/2)} = \frac{2\pi^{d/2}}{\Gamma(d/2)}. \tag{4.22}$$

ここで $\Gamma(z)$ はガンマ関数であり、

$$\Gamma(z) = \int_0^{\infty} t^{z-1} e^{-t} dt$$

で定義され、 $\Gamma(z) = (z-1)\Gamma(z)$ のような性質がある。 $\Gamma(1) = 1$, $\Gamma(1/2) = \sqrt{\pi}$ である。(4.22) より、 $S_2 = 2\pi$, $S_3 = 4\pi$, $S_4 = 2\pi^2$, \dots が得られる。

d 次元のグリーン関数はフーリエ変換に頼ると、

$$\begin{aligned} G(r) &= \frac{1}{(2\pi)^d} \int \frac{1}{k^2} e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{r}} d\mathbf{k} = \frac{S_{d-1}}{(2\pi)^d} \int_0^{\infty} dk k^{d-3} \int_0^{\pi} d\theta e^{ikr \cos\theta} \sin^{d-2} \theta \\ &= \frac{S_{d-1}}{(2\pi)^d} \frac{1}{r^{d-2}} \int_0^{\infty} t^{d-3} dt \int_0^{\pi} e^{it \cos\theta} \sin^{d-2} \theta d\theta = \frac{C_d}{r^{d-2}} \end{aligned} \quad (4.23)$$

である。ここで

$$C_d = \frac{S_{d-1}}{(2\pi)^d} \int_0^{\infty} t^{d-3} dt \int_0^{\pi} e^{it \cos\theta} \sin^{d-2} \theta d\theta$$

である。角度に関する積分は次のように実行できる：

$$\int_0^{\pi} e^{it \cos\theta} \sin^{d-2} \theta d\theta = 2 \int_0^1 (1-\mu^2)^{(d-3)/2} \cos \mu t d\mu = \frac{\sqrt{\pi} \Gamma(d/2 - 1/2)}{(t/2)^{d/2-1}} J_{d/2-1}(t).$$

ここで $J_{d/2-1}(t)$ は $d/2 - 1$ 次のベッセル関数である。これを用いると、

$$C_d = \frac{S_{d-1}}{(2\pi)^d} \sqrt{\pi} \Gamma(d/2 - 1/2) 2^{d/2-1} \int_0^{\infty} t^{d/2-2} J_{d/2-1}(t) dt.$$

ベッセル関数の積分には次のような公式がある：

$$\int_0^{\infty} t^{\mu-1} J_{\nu}(t) dt = \frac{2^{\mu-1} \Gamma((\nu + \mu)/2)}{\Gamma((\nu - \mu)/2 + 1)}.$$

これより

$$\int_0^{\infty} t^{d/2-2} J_{d/2-1}(t) dt = \frac{2^{d/2-2} \Gamma(d/2 - 1)}{\Gamma(1)}$$

であるので、

$$C_d = \frac{S_{d-1}}{(2\pi)^d} \sqrt{\pi} \Gamma(d/2 - 1/2) 2^{d/2-1} \frac{2^{d/2-2} \Gamma(d/2 - 1)}{\Gamma(1)} = \frac{1}{(d-2)S_d}$$

となるので、

$$G(r) = \frac{1}{(d-2)S_d} \frac{1}{r^{d-2}} \quad (4.24)$$

となる。

よりストレートな方法は (4.2) を直接解く方法である。原点にデルタ関数を置いたグリーン関数は r だけの関数である。したがって、 $r \neq 0$ では

$$\Delta G(r) = \frac{1}{r^{d-1}} \frac{\partial}{\partial r} \left(r^{d-1} \frac{\partial}{\partial r} G(r) \right) = 0$$

である。したがって、

$$r^{d-1} \frac{\partial}{\partial r} G(r) = C \rightarrow \frac{\partial}{\partial r} G(r) = \frac{C}{r^{d-1}} \rightarrow G(r) = \frac{C}{2-d} r^{2-d}.$$

係数 C は次のように決まる。(4.2) を半径 r の球で積分すると、右辺は -1 であるが、左辺はガウスの定理を用いると、

$$\int_{V_r} \nabla \cdot \nabla G dV = \int_{S_r} \nabla G \cdot d\alpha = \frac{C}{r^{d-1}} S_d r^{d-1} = C S_d \rightarrow C = -\frac{1}{S_d}$$

ゆえに

$$G(r) = \frac{1}{(d-2)S_d} \frac{1}{r^{d-2}} \tag{4.25}$$